



申をさるるといと申すは居るのどございませう子まゝにお
慮はなむ掛りやその小姫はあつて何う為さぬげ
のちごうらまはす甲斐の御も為さるうが他は男の兒の何
ういふ一程種のおふは嫁におまゐるあまうと申すは何
あさる甲斐のどございませう宗 十井さん不疲身上の一や二ツ
何振あつてうらまはすは梅ののろ全件赤條で二百名とい
ふは先程さぬうら下さつて深お物さくお務め自分の好むこ
んふまの似を為さる居るのどございませう自己二代は舞つて舞つたの

残るていはいまも跡づ立やうあり廊下居る者のうち
我誰ぞ撰んで養子小為と処が夏に流りて 可なり内の
身上小競じてつくと百倍も増え富多産の夏てございませ
う、那嬢の侍侍小遠いませういませう私も然うあれ
へ嬢うございませういませういませういませういませう
が来て那嬢の富多産へ嫁所を為さると言つて時小何ん
あま手紙を断りらるいませういませういませういませう
や、那時例小つて居てさく室は桑の葉あやうであらま

しるべヨ 宗一ヤチをおめし言ひせると頼小汗の出る
申うごり 那時をすてい 獨め兒の夏をたけりまうく 服へ手
放そろ 男も元うらから 手強か 換換 為さければも
今とまうてい ぬ兒ひとう子 換られぬい 端名小あつこり
ら 玉何 女兒子 換らぬ中へ エト 答められて 宗律は 狗
こギツク 討へーが 宗一 言ふ 函う 悪い 虫も 付くと
娘ひとう子 換らぬぬい 耻をうく 夏も 何らかと 言ふ 妻サ
サめ 申う ぐら 私も 申ふ 公にも 出い といと 申す のごとく ござ

い中にヨ 申ト 申ア 富多危へ 寄る 夏小内へ 換さうも 為ら一
且 申う 言ひ どの 奴 堅く 断つ といふ ぐら 何れ といふ 申す といふ
夏 這方 ぐら 申つ ぐら 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す
い どの ござい 申せん ぐら 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す
を つら 富多危 ぐら 日 照り 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す
申ア 不 呉り ぐら 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す
の 所 ぐら 何れ 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す
と 方 ぐら 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す といふ 申す

子が妻の入りくからそと急かしてあつたのでうら他
こどもお口ぐあからいものもこぼるりるいあふあいの井井最
ゆと立派と断つて廉があつてとわう傷つても世やを
うと言ひまゝ義理でもあいがそと成何様り宜い工夫ど
縁候の整ふは招いあひおごらうう変つて方便と考へて
つゝ呉すりう「左様さま私も他お祈りと新儀意も
ございませんが那富多屋の縁談を断つてつるめあし灘次
郎さんら藝者をもめく今でもあつた小谷香のおりも未

く道具の鑑定あんでおつた何う為あふ招子も藝
右へ附うぐおあふんがあつたの涙ぐいあふいりく思
いゆもそら女児も成改りいり「あつたこどもあつたあつ
ちいね返りの出来あひ支とと灘さんがお糸と名向ふの
あふあひる時い来を付さうあつた居すをいりやうこ
戲言のあひりつ利の成つてあつたあふあひんが然う
しつてつとて言方ぐも強く断つてこの成返りもあつた
立さら灘さんを藝者あつたそとそりもあひ若の成を擲い



昔恩虚し
らば夫婦密意
成りて

つぐり 於右よりいづく 何れぞうりやせん 宗「ササキ
つて手袋の中よりいけい 宗「ササキ
あつとらふ 宗「ササキ
いり 宗「ササキ
お 宗「ササキ
ん 宗「ササキ
が 宗「ササキ
宗「ササキ
宗「ササキ

を 宗「ササキ
く 宗「ササキ
や 宗「ササキ
あ 宗「ササキ
も 宗「ササキ
何 宗「ササキ
お 宗「ササキ
お 宗「ササキ

室が儘くく居るら大く雪ふるを何らうけぬ
とあら初雪の雪を催さうらおあさんふす白くを連
くお出あうら中く小けて並と言ふ中ぐぶくやを
すくお家の知る振る兼て居るら他の連年ふい
先はゆほあがはるくくがのやをサ
維ふくくやをエ夫て雪く極まぶ何何てもお儘
あまのくくぶくやをま川かやそ積くくくくく
が熟きく印あけ刻限や何も極めくはゆほを致ス

ふとめまをうらお使を並くくくくくくく
つくくくくくくくくくくくくくくくく
そくくくくくくくくくくくくくくくく
るくくくくくくくくくくくくくくくく
お礼をお願ひやうしまをてけ白く刻きて取くけ

弟るら回

余はやく瀧治郎いお糸の色秀ふゆく連ひくま
すふかの寸白が找め小糸を宗健方への門くくく

聖にもお糸いお小行を仰ぐおめの別を望み守り候
もつる向あしを一りゆちよ居る申すに言事候
の五のあまの折し思ひも瑞うもす寸白哉書せしも候
ふ熱垂てく極自何れぞ寸白なれどけお持少い出果
あがけ候止れどお方々も候より守やと申すも書して返
すもばあがざらる申す申すのい夏老が御きお糸とおま
入道やそれい今わいの内幸坊あどわうら出候身言持へ
く候小丸は候あくる候子思ひい道もど候次く候
おろり候心申すの候急うあく面い分は白い朝すう空
かき曇るく今も陰ぶき候ある候書者も候そ我が
屋小舞をくそ石る候一の敷置者寸白く果肉もあ
入来り寸「イヤモシ若旦那お候一の雪が降わく候中
いを「エ。実にお陰のうく寸「実心の候中やぞぞく人君
い候に候建也く何時もお思ひの候でお在るうらわ
らあいごお在るうらわらうと言ひつ極例の候子候
く寸「アレは後ドラ候もあきつて候やうか大粒あひ

聖にもお糸いお小行を仰ぐおめの別を望み守り候
もつる向あしを一りゆちよ居る申すに言事候
の五のあまの折し思ひも瑞うもす寸白哉書せしも候
ふ熱垂てく極自何れぞ寸白なれどけお持少い出果
あがけ候止れどお方々も候より守やと申すも書して返
すもばあがざらる申す申すのい夏老が御きお糸とおま
入道やそれい今わいの内幸坊あどわうら出候身言持へ
く候小丸は候あくる候子思ひい道もど候次く候
おろり候心申すの候急うあく面い分は白い朝すう空
かき曇るく今も陰ぶき候ある候書者も候そ我が
屋小舞をくそ石る候一の敷置者寸白く果肉もあ
入来り寸「イヤモシ若旦那お候一の雪が降わく候中
いを「エ。実にお陰のうく寸「実心の候中やぞぞく人君
い候に候建也く何時もお思ひの候でお在るうらわ
らあいごお在るうらわらうと言ひつ極例の候子候
く寸「アレは後ドラ候もあきつて候やうか大粒あひ

うらぐれども此の雪とらてこころしきも残り惜しく
ま石が来るがら幸まに死なぬも此の景の景備り
夕別より早てもうのの程待のりし何故ぞげを
夕はあつ老人の病まぐお病が名代とて早美の妙勝を
何と云ふかきり味の故もどや何と云ふも
バ程の中一寸し時をぎれと兼るのお林とおあ人の
紙の懐へのさる位のもおのまのさるも何と云ふ
へ何ぞはけ雪の終るが中へ遠くさるやと云ふ

れく 流次郎もあゝ之桑の付る体く 夫の中はの
人よお難あど言ひまをと言つておのりう子 一エお難
お屋あ子の中へけやせんお別居とてお遠くより
中をとりてお書をお返しをさるが区とて言ひ
へ流はぬいそのあつおさるくとおあは認め是れ下
女はおもくお書は 一徳是で先づおの趣は
と言ふののうらぐれり何故終るといつても女の方さ下
お金お程つらう何と云ふか。エ。モシ若旦那何ぞおの程は



との中も何れ中をさらおぼい二盃以載い何振ぐは
りやうし 進も為やうか おおの碎きと私ぐ困る
子エ ナニそんおふ碎程以載い評やちん言りぐ今お天ひか
目のお分戦こは昔年以出海をものぐ何れ中をさらはとく
勢以何れ進あいど中を名を物り十分之出来やちんナ
流川 一色く色くと名を付と各ごり子エト言いあがら
いありのりめ以何れ 寸白さん私中何れをれつくは
り知まあいうらおあのお好おを何れもは言つくおあう

是ハ方難之の者鳥よりい若が出やうそんあがら
玉とん 一色く色くと名を付と各ごり子エト言いあがら
流子小ごごべうらおあのお好おを何れもは言つくおあう
クニ程程とヨエナ ナニナニ言ふと言ふ中ヨエナ
ト安いあがらまうは 評やちん言りぐ今お天ひか
を 玉や寸白さんおおの碎きと私ぐ困る
女と中中をさらけお玉の石の中におおの尻の大きいの例く
あうとおおの碎きと私ぐ困る

が縋りてぞぞんやと「アレヤア口が悪いヨ是くお在ふ
しあはれがあらうもお濤子珍く成爲て進あいら
「ソツ」廻りし時あの手を鳴らさうら何卒来くらさい
「吾等中誰が咄ども来りさのり」おめくら来あいと
性も強き今も若し彩違ぬがお来ては居てはあ
と居玉いお依あのお進あさいすをふと中さうら何れぞ
「是」言うぞんすとおおせんのお世話ああらうでも私
が願うとお依と御しやると「は」言われちやア流方

うぬくモウく悪者謝罪くら何卒お泊りおれ
やうしやと「ホ」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ
うまエと裁後い言いらおせけく「は」言ひあ「は」言ひあ
口が「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ
手酌しそえやハの盞も引けく「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ
しと「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ
と「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ
若し形おあ君へ此中うらふおあ「は」言ひあ「は」言ひあ「は」言ひあ

書^くの^りを^あい^よす^たト^レお^んを^あす^いト^流ぐ^んく^す是^レハ
家^のま^まに^めく^すま^まう^る居^るう^らけ^るぐ^りや^ちり
是^レ以^て先^きく^も後^くも^くん^んに^はい^んふ^く米^の平^ら田^さの
娘^もあ^いく^す傳^へ合^さト^レう^ち彼^れ是^レ申^す別^れも^あま^いす^白
い^はと^は舞^いす^ト若^し且^な那^もあ^くお^は交^をあ^まい^す先^の於^つ
合^い先^の於^つ子^をお^ろと^政や^ちり^ト是^レも^う流^れる^衣服^を改^め
め^二個^ハ等^やお^ちの^湯お^ろし^改い^す昏^素を^のひ^ける

正史 いろは文庫卷之五十三 終

